

年間第 22 主日 (マタイ 16:21-27)

十字架を担う時点から、復活の命が始まっている



8月29日、8月30日まで当然夏休みだと思っていた中田神父のような年代には、24日月曜日からさっそく学校に通っている小学生中学生は、本当に偉いです。ではさっそく福音朗読に取りかかりましょう。

イエスは、これから起こる重大な出来事を、ご自分と寝食を共にしてきた弟子たちだけに打ち明けました。彼らなら、理解してくれるかもしれない。そういう期待があるからですね。ペトロがすぐに反応しました。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」(16・22) 慈しみ深い父なる神が、そんなことはなさらないはず。祈るような気持ちだったでしょう。ペトロはイエスを愛していたからこそ、イエスの十字架を受け入れられなかったのです。

皆さんだったら、イエスが打ち明けた重大な話に、どのように反応しますか。「イエスは、御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。」(16・21) ペトロと同じような反応をしますか。それとも、あまりの恐ろしさに、言葉も出なくなりますか。

それは、ご家族の一人から、「調子悪いなあと思って健康診断を受けたら、精密検査に回され、なんと、余命半年と言われたよ。こんなことになってごめんね」と打ち明けられた。そんな感じでしょうか。皆さんが家族の一人だったら、どう反応しますか。あまりの恐ろしさに、言葉も出なくなりますか。

あなたが余命半年の診断を受けた人のパートナーだったら、「何てこと言っているの。そんなことあるはずないじゃない」と言わないでしょうか。たとえ事実でも認めたくないし、これまで積み上げてきた人生を考えると、愛するパートナーに言わないでは居られないでしょう。

ペトロの反応も、ごく自然な反応だったと言えます。常に自分たちの尊敬する姿で前を歩いてくださった方なので、宗教指導者から多くの苦しみを受けて殺されるなど、想像すら出来なかったのです。

「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」(16・23) ペトロはイエスを思って言ったのです。しかし、その愛情の中にさえ、神の思いではなく、人間の思いが入り込んでいました。だからイエスは、ペトロの言葉そのものではなく、その背後にあるものを退けます。今回は、みごとな信仰を表明した先週のペトロのように「神の思い」に沿うことができず、「人間的な思い」から逃れられませんでした。

何事も、先頭を行く者が決断をし、あとからついて来る人たちはそれに従うものです。未知の場所への探検で、先頭を行く者が「右だ」と言っているのに、あとをついて来る者たちが「いや左だ」と言えるはずがありません。イエスはご自身先頭を行く者としての自覚をもって、自

分が十字架を担うのだから、あとについて来る者も十字架を背負うのだと戒めます。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」（16・24）

十字架刑は、当時の刑罰の中でも「極刑」です。十字架を背負う人は、当然その十字架に磔にされるわけで、すべてをはぎ取られることになります。イエスは上着も下着もはぎ取られ、裸にされましたが、それは着物をはぎ取られただけのことでしょうか。あるべき姿、尊厳も名誉もはぎ取られた、ということではないでしょうか。

そうであれば、イエスのあとを行く弟子たち、そしてそれに続く私たちも「十字架を担う」ことで、人から認められたい欲求やこれまで積み上げた経歴もはぎ取られた上に十字架を担うことになる。その覚悟が求められます。人からどのように見られるかを身にまもっていても、イエスが求める「自分の十字架」を背負うことができないのです。

イエスが背負う十字架の中心にあるのは「苦しみ」ではなく、父なる神への従順と、人間を愛し抜く愛です。誰も十字架は選べません。しかし、十字架をどう担うかは自分に問うことができます。いかにも苦しそうに担うのか。自分の力に頼って担うのか。

もしあなたが、先に十字架を担われたのはイエスだと気付くなら、担うための力もイエスが与えてくれると知るでしょう。なぜならイエスは受難の予告を三度もなされ、常に先頭にいて十字架を担い、永遠の命を得る道を進んでくださるからです。力は、先頭に立っていっさいの十字架を担ってくださるイエスが与えてくださいます。

決して華々しい道ではありませんが、この道は確実に、「まことの命」への架け橋なのです。イエスは今も弟子たちすべてに、信頼を寄せているからこそ、自分の十字架を背負ってあとに続くように求めます。

「まことの命」「栄光に輝く命」。十字架を担うことがその架け橋になるのであれば、自分の十字架を背負っている時点ですでに「まことの命」「栄光に輝く命」は、始まっているのです。

年間第 23 主日(マタイ 18:15-20)